江苏工业学院图书馆
藏书章

第Ⅱ期　第十五卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十五巻
第二十一回配本
（全二十六巻）

一九八九年七月二七日　発行

定価四五〇〇円
（本体四三六九円）

著　者　野上彌生子
発行者　緑川亨
発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六〇四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1989　Printed in Japan
ISBN 4-00-091165-1

目次

昭和四十年……一
昭和四十一年……二五〇
後記……五七九

昭和四十年

一月一日　金　小雨

夜来の小雨が十時すぎごろよりあがつて、おだやかな美しい日和となつた。横山さんにはおせち料理を食べさせたが、私は昨年から流儀を変へた通り朝はいつもの通りお抹茶二杯にお菓子。年賀状どつさりとどく。さういへば二、三日まへとどいた外国からのクリスマス・カードにマダム・フジタがお孫さんの小さい男の子二人ととつたシャシンを入れて来た。泰雄さんの長男、次男。長男は細面の美しい子で、次男は丸顔のチヤメらしい利かぬ気らしい子。その長男の子が謙一の弟ともいへるほどよく似てゐる。

例年のごとくおひるまへにMの家族、Yの家族ことごとく集まり、パンに紅茶、岩波からのおせいぼのビーフやハム、ソーゼ(ママ)におせちの二色玉子やきんとんで会食。素一がコッピーニ大使に貰つたのを一本おいて行つたウィスキも抜く。これはもう何年とつづいてゐる年頭のたのしい団らんである。そのあと打ちそろつて市河、原さんにちよつと年賀、原さんの前庭でみんなしてシャシンをとる。燿三のところも覗いて見る。クリスマス・プレゼントにしたルーマニアの卓掛が寸法をはかつて拵へさしたやうにぴつたりであつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

茂吉郎と正子は近くにゐるファーブルさんのところへ最近生まれた赤ちゃんにあげる物をもつて出掛ける。留守だつたさうだ。それは大使館員として宮中によばれた為で、Mたちの来訪をきいて参内の姿で答礼に来たのを、ちょうど狛江の明子のところから廻つて来た朗子は見たさうな。あとでモキにきくと、奥さんの長い裾をモキの家までの庭伝ひにファーブルさんが捧げたのだといふ。私はまだファーブルさんには逢つてゐないが、南仏生まれの明るい人で、茂吉郎のところへも御茶に呼んださうだ。そんな時は母屋を利用せよといつてあるのに、あの鶏小屋のやうな家で平然とやつて行くところ、茂吉郎も正子もえらいと思ふ。

朗子から明子のところの昭一のことをきく。

一月二日　土、晴

今日もおだやかな美しい晴れ。一、二日まへから朝崖の方でコジュケイが高々に鳴く。毎年御正月ごろに鳴くか知ら。気がつかなかつた。小春のやうな和やかな天気に誘はれたのかも知れない。年賀の客もなく、横山さんも来ないし、表の人通りもなく、まことにしづかなことである。午後ベッドに横りつゝ大内氏の「マルクス・エンゲルス」をよむ。夜は日生劇場？かに来てゐるアメリカのミュージカルをテレビで見る。ひどく自然で、自由で、その点日本の真似ごとの及びえないおもしろさを見せる。女たちの顔などテレビの事で隠しえない年齢や荒れを見せてゐるのであるが。

一月三日　日　晴曇、夜

今日もひとりで静かな一日、だし洩れの年賀状二、三枚、講談社の保立さんには原稿の直しができて

ゐる旨をも書き添へる。

「朝日賞」の発表に中さんと大仏さんがいつしよに入つてゐる。中さんに御祝ひのデンワをかける。私情としては彼の入賞はよかつたと思つても、これらの二人にどれだけの文化的な功労があつたとするのかといふ問題になれば、選択は疑問になる。しかしまあ世の中の現象はこんなものであらう。大内さんのマルクス・エンゲルスを読みつゞける。ヘーゲルを否定したとしても、彼の考へ方の根本になつてゐるものはヘーゲルの説いた弁証法であるのをます〳〵強く感ずる。午後のベッドでは芝木さんの「夜の鶴」をよみかける。筆はこなれてゐて有吉さんのやうな粗雑さはないが、しかし下谷の花柳界の描写などは硯友社時代の人々に任しておけばよいものだとしか感じられない。

夜はM一家と会食。

一月四日　月　晴冷えこむ

午前「マルクスとエンゲルス」。午後××××年賀。エヴァソフトの布団カヴァ持参。御年玉として受けとるには高価過ぎるもの故、代価の1500円を支払ひ、他に千円札一枚祝儀。いまは支店の方で四十人ばかりのものにサイハイを振るほどになるゐるらしいが、結婚の相手はいつそう見つからないらしい。四畳半の部屋を、店の伝票で買へる敷物などで飾りたて、いつぱし快い巣を作りあげてはゐるが、いつまでも未婚者として生きなければならず、まだ手取り二万足らずの収入では老に入つての生涯を支へるだけの貯蓄もむづかしい。都会の片すみにはこんなタイプで毎日を過す娘が夥しいのではなからうか。

今日は市河邸では英文かんけいの七人会といふのあり、英文学に因んだ福引きをするとて、燿三がアウト・サイダーを論じた作家の名を覚えないかと訊きに来た。私にもちよつと思ひだせず、代りにクローニンの「城砦」をシタデルとして舌だし三番の人形でも拵へてはと提案した。

一月五日　火　晴夜雪

元旦からの二、三日に引きかへて急に冷える、今日が寒の入との事也。

午後多田さん年賀に見える。茶の間で法政の話などきく。朝、三枝さん玄関まで。

午前は「マルクスとエンゲルス」、午後ふたたび読みつゞけて読了。大内氏の明快な祖述でこれまで漠然と知つてゐた事もはつきりなつたものが多い。それより私の心をもつとも強く打つたのはマルクスとエンゲルスの友情である。いかに親しい友人のあひだにも、おたがひに優秀な人物で、万人にすぐれた学問、才能をもつてゐればゐるだけに一種の争心や妬心を秘めがちであるが、エンゲルスの傾倒の純真さには比類を知らない。大内氏は管鮑の交はりにたとへてゐる。現在の中共の指導者たちの間柄はおそらくこれに近いものかと察しられるが、マルクスのために常に第二ヴァイオリンを弾くことを悦び、誇つてゐたエンゲルス、この第二ヴァイオリンであつたればこそ、マルクスのオーケストラともいふべき資本論はこの世に現はれることができたのである。

この世には第一ヴァイオリンを弾かうとするものばかりで、――それもそれだけの能力も持たないで――進んで第二ヴァイオリンを受け持たうとするものは少ない。

夕方加藤猛夫氏年賀に玄関まで。

一月六日　水　雪、おひるまでにやみ、午後晴

御正月にはめづらしい雪が庭の木立、屋根をまつ白ろにしてゐるのをベッドからのぞいておどろいた。おきた頃はまだちらちらしてゐたが、次第にやみうす陽がさし、午後はきら〳〵と晴れわたつた。

今野一雄氏午前来訪。もうちやんのフランスの子供の本のことについて私からハガキさしあげた為。もうちやんにも来て貰つて、茶の間でいろ〳〵うちあはせる。

午後はベッドで芝木さんの「夜の鶴」のよみさしをつゞけたが、筆だけ達者で新しくこころに迫まるものがない。

一月七日　木　曇小雨冷えこみ強し

林屋辰三郎氏の「京衆」をよみはじめる。秦氏、八阪造の如き帰化人の日本への寄与は研究すると屹度おもしろいのであらう。

一月八日　金　小雨

十四日の婦人公論の講演の為中央公論五十年史をよむ。

講談社の保元(立)和子さん来訪。手入れの終つた「笛」を渡す。ウスキから昨日みかん、今日宗麟五本とどく。ウスキの力一郎、道郎方へ貰ひ物のチョコレートと小布施の栗ラクがんの小包、寺沢さんと岩田さんにカイボシの小包を横山さんにださせる。

一月九日　土　晴

午前三枝子現はれ、いろ〳〵手助けをしてくれる。お酒もあけて見たら十本入つてゐた。中さんからデンワ、十三日に朝日賞の入賞式に列席につき、服装の事など相談。ハカマに無地の羽をりぐらゐでよからうと返事する。宮沢さんといふ毎日新聞社の人がサインを欲しいとのデンワが昨日あつたが、「秀吉と利休」と「鬼女山房記」持参。奥さんが私のものを好んで読むので、誕生日の贈物にし度い為との事。たのしい話なので文庫版の真知子にもサインして呈上。

二月号の「展望」がとどき、唐木氏のしん女〔語りぐさ〕が載つてゐるので午後読了。一休に愛せられた盲目のびは弾きの女の話の型をとつてゐる。こまいろ〳〵と語られてはゐるが、描かれて欲しいところが描かれてゐない。一休と結ばれる最夜のくだりなど、びはと小唄を利用することでもつと文学的な匂ひの深い描き方が可能なはづではないか。

一月十日　日　晴

中央公論社五十年史をこの間から読みかけてゐたのを読み了る。

この夏山で読んだ「秀吉と利休」及び迷路のソノラマがとどいたので、燿三のところへもつて行つてステレオできく。あまり旨くない。谷崎、吉川、室生氏のものなどもちよつときいて見たが、同じく感心しない。

午後は燿三が出掛けて来て、茶の間でいろ〳〵話す。お抹茶も御馳走。「宗麟」二本呈上、一本は実験室の作業に来てゐる東芝の男たちに飲ませるといふ。

これは昨夜の事であるが、人民中国でまだ続いてゐる溥儀の自叙伝の十一、十二月号をよんだ。ハ

ルビンから北京に移された当時の、彼のまだ猜疑と死の恐怖に陥つてゐたころの心理が中ゝ細やかに記されてゐる。

一月十一日　月　小雨、雪となる。

今晩は家族のクリスマスの会食を延期して新年といつしよといふ企で晩翠軒から出張の手はづになつてゐるのに、生憎の雪がふりだした。もし出掛けるのだつたらどんなに困つたことだらう。そのために一日のばしたSも夕方まだモキや燿三の帰らぬうちに現はれる。ユネスコの会の為に上京したのである。

食器だけがなにか手違ひが届(ママ)かなかつたので、それを待つ間シナ人のふとつたコックの爺さんといろ〳〵現在のシナ料理の話をする。一般の料理は日本人の口にあひさうなものを主として作るので、北京の、広東の四川のと名はつけても、交ぜこぜでやつてゐるのが実状との事である。テンプラもかば焼きも、さしみも、うま煮もといつた有様らしい。一万五千円の一卓であるが市河おぢいさんも交へ、R子も加へて十一名がたつぷりおいしく食べることが出来た。チップ三人に500円づゝあげる。

一月十二日　火　美しい晴

婦公の講演を時計で時間を計りつゝ準備。こんなものでも引き受けるとなればデタラメは出来ない。午後講談社の保元さんカメラ・マンをつれて来訪。書斎でスナップ。若いカメラ・マンの方もだいぶ左が利くらしい。仕事のあとウイスキをだす。保元さんは昨今クルマの取り締まりを厳しくやつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てゐる最中でアルコールは危いとの事故、口をきつた宗麟を一瓶呈上、うちへ見える婦人のジャナリストで自分の車で用を足してゐるひとは彼女だけであり、またその態度も村山さんや小島さんとは違つてゐる。社によつて、婦人記者も特殊のタイプをいつとなしに身につけるものであらうか。もとよりその人の性質にもよるだらうが。俳優座の役者を夫にしてゐたといふ保元さんは私にはいつたいどんなひとかまだよく分らない。

伊豆大島元町が一昨夜ほとんど町そのものがそつくり消滅したほどの大火。日本のやうに火災の多い国もないのではなからうか。

N・H・Kの特派員のとつたヴェトナムの仏教徒のフィルムには多くの事を教へられ、考へさせられた。従軍僧が米軍の兵に示す冷然とした無視が画面にはつきり現はれてゐた。

これらの仏教徒の社会運動は日本の僧侶たちの現在の社会に対する態度とは全然違つたものであるのに驚く。彼らの救済は来世ではなく、現在の民衆をいかに救ひ、導くかにかかつてゐるらしい。

一月十三日　水　晴

この年になつての一番厳しい寒さと伝へられるが、晴れた美しい日射しで、部屋さへ暖めてゐればなんらの冷気をも感じない。弥一氏けいこに来り、小原御幸の後半をお浚へする。語りのところがまだけいこ不足で旨くいかない。

一月十四日　木　晴

朝八時ごろウスキよりデンワ。おかね小母さんが昨日死去との知らせ。慶応三年生れで数へ年で百

歳との事。それこそ年齢には不足はなかつたわけであるが、昨秋の帰郷中に逢つた人がこれで三人逝つた。佐志生の祐賀丸の吉助、西田鉄、――これは先日の金次郎よりの手紙にあつた――今度はおかね小母である。つぎ〳〵の死のおとづれは自分の運命を予言するに等しいのに、かうして日記に書いたり、平然としてゐられるのはいつもながら不思議な事かな。

「世界」で石川淳氏の「至福千年」をよむ。二回目で一回はよまなかつたが、旧幕末の江戸における隠れキリシタンを取り扱つてゐる。いかにも古めかした鏡花に近いやうな文体、これにもファンがあるのであらう。

六時水口さんが迎ひに来てくれて婦人公論の講演会に出掛ける、サンケイ会館、読者のスイセン作品の授賞式の附録のやうなもの。有馬稲子、石川達三に私といふ妙なくみ合はせ。有馬さんのは聞かなかつたが、石川さんが「小説とモデル」といふ題で、自分の作品を一つ一つ列挙するのにはおどろいた。それについてのモデルに言及するわけ故必要でもあるわけだが、私には到底あんな態度、むしろ趣味はもてない。私は故嶋中氏の事から話したが、相変らず話が下手で落第。しかしこれでもう頼まれる事もなからうと思へば、いつそ話下手も可としよう。そのあとの福田屋の会食は御免蒙りたかつたけれど、これも御つきあひと思つて列席。かういふ人とのかうした酒席の様子を見るのも私には社会勉強とされるが、なんとしても水に油が交つた感じでよくない。石垣綾子さん、受賞者の角田房子さん、高峰秀子さん、有馬稲子さん、客側の婦人はこんな顔ぶれ、高峰さんはもう年齢も行つた事ながら、有馬といふ人、ちつとも美しくない。みづ〳〵とした点皆無のうへ、なに

か生色がない感じである。芦原英了氏に久ゝにてお逢ひする。大家壮一氏〔宅〕も見えてゐたが、先きに帰られた。心臓病ではじめた食餌療法が極端で営養不良に陥つて元気がないとのこと。とにかく今度はかうしたものから極力免がれる事に努めなければならない。

一月十五日　金　晴

井上靖氏から「羅刹女国」を贈られてゐた。御礼を書くまへに少し眼を通さうとして読む。インド、中国の説話、史話をアレンジしたものである。「羅刹女国」はホメロスの「オデュセイア」を思ひ浮かばせる。セイロンあたりの小島が舞台らしいといふから、かうした神話、伝説の分布を辿る糸の一筋になりさうだ。

午後三井ふたばこさん。カイボシを取りに来たのである。

今度の中国の人民代表者に毛沢東夫人をはじめ周恩来、劉少奇、赤〔朱〕徳それらの要人の奥さんたちがことごとく選ばれてゐる。私は中国旅行でいつか屹度その日のあることを言及しておいたが、終にその時が来たのである。彼らが社会の表面に出現する時は、何々夫人といふ、夫の名によつての副もの的な存在としてではなく、その閲歴、実力、才能によつて自主独立の人間としてであるだらうと私は書いておいたのであつた。

一月十六日　土　晴

ウスキから浜町の本店のシャシンがとどく。講談社の百合子さんともやひの全集の一巻にのせる他のシャシンに加へる為に、至急に撮影して送る事を頼んでやつたのである。酒蔵のナマコ壁がはつ

きりと出てゐる。こんなナマコ壁を残(ママ)つてゐる家は臼杵でももう他にはないのである。故郷にかうした故家をもち、肉親のものにいつも最上の愛情をもつて接して貰へる幸福を感謝しなければならない。川瀬さんの御主人午後玄関まで。御病人は相変らずとのこと、カイボシ、書物呈上

一月十七日　日　晴

一時から柳橋の柳光亭でアベさんの受勲の祝ひのうたひ会に行く途中、クルマを関東中央病院にとめて入院中の末弘さんを見舞ふ。転んだのもやつぱり精神的な疲労が極限に達してゐた為で、今度の入院がいつそよい保養だと御本人も考へてゐる。小布施のらくがんと書物をどつさりあげる。他になやみはなく、腰の挫けた骨がもと通りになるまで静臥してゐるだけだから、読書が唯一のなぐさめになるわけである。時間が十分だつたのでそれから空也に廻つて先日晩翠軒がとどけてくれた黄粉をまぶしたお餅と最中を仕入れる。例のうち物と、大徳寺納豆を貰ふ。京から壁ぬりに来た職人のおみあげとのこと。珍しく主人がゐての話、なほ柳光亭のうたひ会に出掛けることを話したら、あすこではハムブルグに――あとで柳光亭のおかみにきいたら、デュッセルドルフとのことであつたが、店を出した話をして、みんな海外にでも活動するのに、うちでは相変らずでと語るので、私たちとしては空也が空也式にどこまでもやつて欲しいのだといつておいた。隣に新築したビルディングで店も改築されてゐるが――ビルも空也の金かも知れない――店の構へはもとの池の端時代からの型通り。ただ看板のひさごや横額まで盗まれたりすると嘆いてゐた。さういへばもとはなかつた「空也もなか」と紺地に白く染めぬいた暖簾がかかつてゐた。

柳光亭での来会者は三十人あまりはあつたらしい。私の「小原御幸」はまあ無事に終つた。アベさんの鉢ノ木のワキも後半で彼の本役らしいものを出した。ただ食事のまへのスピーチで弥一さんが流儀の為には力をつくすが、芸はまだ研き足りないとの意味をくど〳〵述べたのは、彼の場所と時を弁へぬいつもの悪癖である。大勢の新しい人々は弥一さんをもつともエライ師匠と考へて稽古を受けてゐるのだから。柳光亭のかみさんも「岩船」を舞つた。まる顔のくる〳〵した中年の女。中ゝ悧巧者らしい。外務省の林さんが私たちの事を噂するとの事であつた。

帰ると留守に平山さんが見えたとて御菓子、また角田さんよりは赤坂のゴトウのバラとカーネーションの花がとどいてゐた。日曜日に来訪のデンワがあつたのを、うたひ会の為にまたの機会にして貰つたのであつたが。……

一月十八日　月　微陽

午前三枝さん、講演会の御礼持参。午後はまた新潮社の小島さん。つぎの長編の掲載を期待してゐるが、それに応じられるかどうか分らないのだから、貰ひ物などは却つて困まる。

朝ウスキからデンワ。シャシンがとどいたかどうかといつて来た。到着の旨をいひ、ちょつと話す。正面の窓の壁のキズが欠点である旨を話したら、またもう一度デンワで、それは印刷の時修正が利くといつて来る。講談社の保元(立)さんにもそのシャシンの事でデンワしたり雑事つぎ〳〵也。

また新聞に河井酔茗氏90才で終に逝去との記事があつたので、島本さんあてに吊電を打つ。

一月十九日　火　晴

ひるまへから田中松枝さんが朗子と来訪。ウスキ話いろ〳〵。昨日新潮社の小島さん持参の大〆のむしずしで正子も加はつておひる飯をたべる。「朝日」の諏訪渡りの文について手紙を長屋清子さんといふウスキ出のひとに数日まへ貰つたが、小野長生子さんや松枝さんと同級とあつたのでそんな話をもした。海添の蓮池のまへの稲葉さんが実家と書いてあつた。この家には小学校のころお三味線のけいこに行つた覚えがある。なにを教つたかもはつきりしない程度だが、家のまへの蓮池の花や、土塀、それにいつしよに稽古に通つてゐた喜楽庵の娘が、これは踊りも教はつて、塩汲みの桶などを肩にして踊るのを、一種羨やましい気もちで眺めた事まであざやかに記臆してゐる。浜町の家の空気からは三味線のけいこも不思議に思へるが、糸道ぐらゐはつけておくべきものと一般に考へられてゐたのであらう。

チャーチルの危篤が報じられてゐる。九十ともなれば枯木が倒れるやうに眠るものときいてゐたが、中ゝ臨終にいたらず、苦しみもあるらしいのは、それほどまだ生命力が残つてゐると見える。

一月二十日　水　晴

横山さんを使ひにやつて中さんに宗麟一本大徳寺納豆をとどけさせる。朝日賞の御祝ひに宗麟が役だつたわけである。それにしてもこんなめぐり合せになることが、染井のころに想像されたであらうか。私のこれらのプレゼントも正直にいつて彼の文学への敬意や賞讃のためではなく、私の若かつた時代の思ひいでへの捧げ物である。しかもそれを知るのは彼のみだ。思ひいでといふものは悉しく美しいものではない。私たちのものにしろ、――私にとつては苦しい、懊悩の数十年であつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com